



ニッポン ドクター和の 臨終図巻

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東大第1期卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

熱唱した『母』という曲が耳に残っています。

〈世界を敵に回しても 私は お前の味方だと 涙で誓ってくれた人〉

死は日常だけど、大好きな母の命は永遠であってくれ。涙を誘う歌詞が、この人の遺作となりました。

187 作詞家・作家 なかにし礼

作詞家、作家のなかにし礼さんが昨年12月23日に都内の病院で亡くなりました。享年82。死因は心筋梗塞との発表です。なかにしさんは、2012年に食道がんで余命8



カ月と判明。しかし若い頃から心臓に疾患があったため外科手術に耐えられないと判断、陽子線治療を選択し、見事寛解となりました。

陽子線治療とは放射線治療の一つです。エックス線を使用する従来の放射線治療よりも、治療効果が高く副作用も少ないため、注目されています。しかし、まだ限られた医療機関で行えず、保険適応にならないケースが多いのが難点です。

なかにしさんは、2年半後の2015年にがんがリンパ節に

再発。気管支に密着していたため一刻を争うと言われ、外科手術を余儀なくされました。手術をしなければ数日内に呼吸停止もありうる、それならば手術に

一か八か賭けてみようという覚悟をもって。そして、なかにしさんの心臓は耐えました。大手手術から目覚めたときのことを、著書『生きるということ』(毎日新聞出版)にこう書いています。

〈…痛くて眠れない。しかしそんなことはすべてどうでもいのである。とにかく私は生きている。死ぬことを覚悟していたこの体がこうして生きていて痛いのだ苦しいのだと言っている。こんな幸せなことではないか〉

なかにしさんは、ここから見事5年も生きられました。そう、人生苦しいのも、痛いのも、生きているからなのです。死は日常。されど命は一度きり。本年も精一杯生きましよう。

苦しいのも痛いのも生きているから

謹賀新年。この年末年始、休む間もなく往診に明け暮れました。人の命を奪うものは新型コロナウイルスが怖いというメデイアの煽り方に医療現場も混乱しています。本稿を書いている1月3日時点で、我が国におけるコロナの累計感染者は約23万8000人、累計死亡者は約35000人、累計回復者は19万6000人。

一方、昨年の我が国のがん罹患(りかん)数は約101万人、がん死亡者は約38万人。心疾患死亡者は約20万5000人。だからコロナは怖くない、と言いたいのではありません。私達はコロナ以外で死ぬ可能性のほうが何百倍も高く、死は、変わらぬ日常です。そんなことを考えながら往診の途中で見た紅白歌合戦。氷川きよしさんが